

称号及び氏名	博士(学術) 吉本 陵
学位授与の日付	平成24年3月31日
論文名	ハンス・ヨーナスの倫理思想に関する哲学的研究
論文審査委員	主査 森岡 正博 副査 細見 和之 副査 山口 義久

論文要旨

本論文の目的は、20世紀を代表するドイツ系ユダヤ人哲学者であるハンス・ヨーナスの倫理思想を、彼の二つの主著である『責任という原理』と『有機体と自由』をおもな手引きとしつつ解明することである。本論文の特色は、ヨーナスの倫理思想の背景にある、従来は看過されがちであった存在論的な議論をも組み込んで論述を展開したことである。この作業を通してヨーナスの倫理思想にとって存在論が不可欠の土台であることが明らかになった。

本論文は三つの章からなっている。以下順にその内容を略述する。

1の「ハンス・ヨーナスの責任思想」では、ヨーナスが『責任という原理』のなかで展開した責任思想を明らかにすることを試みた。ヨーナスの責任思想を論じるにあたって、まずその問題意識を明らかにするために、ヨーナスのテクノロジー論を取り上げた。なぜならヨーナスの責任倫理学は「テクノロジー文明」に対する倫理学として構想されたものだったからである。

ヨーナスのテクノロジー論においては、近代以前に特徴的な技術のあり方から近代以降に特徴的な技術のあり方（テクノロジー）への変容が歴史的に跡づけられ、その変容の背景には「知ること」についての理解の変容があったということを指摘した。その上で、テクノロジーの特質を「企て」として際立てつつ、そのうちにはらまれている特有の問題、とりわけ現代に至って姿を見せはじめた問題を取り出した（1-1）。

このような問題意識のもとで、テクノロジーがもたらした新種の問題に対する倫理学である責任倫理学を主題として取り上げた。テクノロジーという新たに手にした力によって、従来は自明の前提とされてきた「人類の存在」が義務の対象となる。テクノロジーという力を手にした者はその力にさらされている者に対して責任をもたなければならない——ヨナスの責任倫理学はそう命ずる。したがって、ヨナスの責任倫理学は力をもつ者と力にさらされている者という非対称的な関係の間で生じる倫理学として提示されるものである（1-2）。

ところで、テクノロジーのもつ力とは、個々人の力ではなく、人間の集団的な営みによって生み出される力である。その力が、究極的には人類の存在をも危うくさせてしまっているところにテクノロジー文明の危機の深刻さが現われている。したがって倫理学はあらゆる倫理学の前提であるところの人間の存在を保護せよと第一に命じるものでなければならない。それゆえヨナスの責任倫理学は人類の自滅というかたちでの人類の「無」への転落を回避し、まずもって人類の「存在」を選び取るように命ずる倫理学である。すなわちそれは人類の自滅を回避せよ命ずる「回避の倫理学」であり、無に抗して存在を選び取るという「存在に向かう責任」を訴える倫理学である（1-3）。

2の「ハンス・ヨナスの生命思想」では、ヨナスのもう一つの主著である『有機体と自由』に着目して、ヨナスの責任思想の母体である「生命思想」を明らかにすることを試みた。ヨナスの生命思想を論ずるにあたって、最初にヨナス哲学の通奏低音とも言えるニヒリズム批判を取り上げた。なぜなら、ヨナス哲学においてはたんにその倫理思想がニヒリズムに対抗するものであるだけでなく、生命思想それ自体のうちにニヒリズムに対抗する契機が含まれているからである。

ヨナスによれば、ニヒリズム的な状況の背景には人間と自然の断絶の経験がある。人間を取りまくもののなかで経験される人間の孤独の表現がニヒリズムなのである。ヨナスは現代におけるニヒリズムを古代におけるニヒリズムと対比させることによって、前者の深刻さを浮き彫りにする。現代におけるニヒリズムを克服するためには、その背景としての人間と自然の断絶の経験にさかのぼって批判を遂行しなければならない。それゆえに、ニヒリズム批判に端を発するヨナスの生命思想は、人間と自然の関係についての省察へと導かれることになる（2-1）。

ニヒリズム的な世界理解にとって躓きの石となるのは有機体の存在である。なぜならヨナスによればニヒリズム的な状況とは生命の理解可能性が失われる状況でもあるからである。ヨナスによれば、私たち自身が生きている有機体である限り、生命という

経験を決して手放すべきではなく、むしろ有機体という存在をこそ、議論の出発点としなければならない。こうしてヨーナスの生命思想は、生きている有機体の存在のうちにその基点を見いだすことになる。ヨーナスは有機体の存在を適切に理解するために、「自由」という概念を導きの糸として用いる。ヨーナスは「自由」という概念を媒介にして人間と自然の間にあるとされる断絶を埋めようとするのである。地上に有機体が出現して以来の生命の歴史は「自由の冒険」の歴史として捉えられる。原初の生命において自由が目覚めて以来、「自由の冒険」は、「冒険」であるがゆえの危うさを抱えつつも存続してきた。ヨーナスによれば、この事実は「自由の冒険」としての生命が自己の存在を肯定していることを私たちに教えている。生命は生命の死滅という無への転落を回避し、存在を肯定し続けてきた。そのような仕方でも自己を肯定する生命という存在は自己の存在を目的とする存在である（2-2）。

ヨーナスは有機体の存在のうちに自由の働きを見ていたと同時に、目的の働きをも見ていた。人間が目的を有する存在である限り、そして人間と自然が断絶していない限り、人間以外のものにも、それぞれの段階に応じた目的の働きを認めるべきである、とヨーナスは主張する。自然のうちに目的があること、あるいは別の言い方をすれば自然のうちに目的因果性が働いていること——それを認めることは決して横車を押す議論ではなく、むしろその現実性を否定することにニヒリズムの淵源があるとヨーナスは見ている。そのうえでさらにヨーナスは議論を進める。すなわち、目的をもつ存在があるということそのものが価値であり、したがって自然のうちに目的をもつ存在（すなわち有機体）がある限り、自然のうちに価値が存在しており、自然は生命を生み出すことによって一つの価値を生み出したのだ、と。ヨーナスはこのような自然ないし有機体の存在に着目した存在論によって自身の倫理学に根拠を与えようとしている。この意味で、ヨーナスの倫理学の基盤には存在論が不可欠の要素としてその役割を果たしているのである（2-3）。

最後に、3の「ハンス・ヨーナスの倫理思想再考」では、1と2で再構成したヨーナスの倫理思想に二つの視点から光を当てることによって、ヨーナスの倫理思想に内在する論点についての切り口を提示するとともに、その今日的意義について考察することを試みた。

最初の視点として、討議倫理学からの批判、とりわけカール・オットー・アーペルによるヨーナス批判を取り上げた。アーペルはヨーナスよりもやや年少ではあるがほぼ同時代を生きた哲学者であり、ヨーナスと同様、生態学的な危機に鋭い問題意識を抱え

た哲学者でもあった。アーペルは討議倫理学者としてコミュニケーション共同体における開かれた討議という概念装置を足場に生態学的危機の時代における「責任倫理学」を構想していた。アーペルはヨナスに対して鋭い批判の矢を射ている。その矢が向かうのはヨナスの責任倫理学の基礎づけであり、その形而上学的な側面である。アーペルのヨナス批判を通して、両者の対立それ自体をどう解釈すべきか、両者の対立は私たちにとってどういう意味があるのかという問題を考察し、ヨナスの倫理思想において存在論(有機体の存在論)が果たしている役割の重要性をあらためて浮き彫りにした(3-1)。

次に、ヨナスの未来倫理の中に含まれる「賭け」の概念を二つ目の視点として取り出し、それをパスカルの思想の中に含まれる「賭け」の概念と対比させながら論じた。ヨナスは自身の責任倫理学の基礎づけは、少なくとも現時点では一つの選択肢であるにとどまるということをはっきりと明言していた。それにもかかわらず、ヨナスの論証する未来倫理としての責任倫理の義務を受け入れるということは、ヨナスの提示する一つの選択肢を選ぶという「賭け」を行うということの意味する。したがってヨナスの未来倫理のなかには「賭け」という要素が含まれている。ところでこの「賭け」は、17世紀という近代の曙の時代を生きた哲学者であるパスカルが『パンセ』のなかで記した有名な「賭け」の議論と同型のものである。しかしながらヨナスの賭けはパスカルのそれとは正反対の仕方になされることになる。その違いは、賭けられたものの重みに対する評価の違いであり、またパスカルの時代とヨナスの時代において人間が世界に行き届く力の違いでもあった。人類が手にした力によって決定的に損なわれ得るものとなってしまった世界に対して、そうした力は責任を負わねばならないとヨナスは主張したが、そのような「世界に対する責任」を駆動していたのは「世界に対する愛」であったということ、またそれゆえに現代を生きるヨナスの行った賭けは近代初頭を生きたパスカルのそれとは正反対の仕方になされるに至ったのである(3-2)。

学位論文審査結果の要旨

吉本陵氏の学位（課程博士）申請論文「ハンス・ヨーナスの倫理思想に関する哲学的研究」は、20世紀における生命・環境哲学を代表する哲学者であるハンス・ヨーナスの倫理思想の全体像を哲学的に解明したものである。地球環境危機の時代を迎えてヨーナスの哲学・倫理学に大きな注目が集まり始めているが、日本においては、ヨーナス思想の全体像を統一した視点から解明した仕事がなく、吉本氏の論文はこの点において独自性を有する。日本におけるヨーナス受容は、原典の翻訳を中心に進行中であり、現在ほとんどすべての主著が邦訳で入手できる（吉本氏自身もヨーナスの主著のひとつである『生命の哲学』を共訳している）。しかしながら、その形而上学的議論の難解さもあって、いまだ断片的なヨーナス研究しか行なわれていない。吉本氏の論文は、ヨーナスの「将来世代への責任」と、「生命の哲学」を二本柱として、その倫理学体系に肉薄するものであり、このような視座からヨーナスの倫理思想の全体像を浮き彫りにした研究は日本においていまだなされておらず、また近年欧米で刊行されるようになったこの種の研究と充分比肩され得るものである。

哲学・倫理学領域の博士論文の審査における判断基準としては、問題意識および問題設定が明確であること、先行研究の調査および文献学的目配りが充分になされていること、立論および論証に独自性があることが求められる。

まず問題意識および問題設定についてであるが、先にも述べたように、日本においては、ヨーナスは環境倫理学の領域で将来世代への責任論を説いた哲学者として扱われてきた。その反面、彼の生命哲学の研究は遅れ、ヨーナスの環境倫理学の底辺に独自の生命哲学が存在するという点が今日に至るまでないがしろにされてきたと言える。その生命哲学は、原始の有機体に自由の萌芽を見るという、いささかラディカルな主張を含んでおり、その意味においても研究者を容易に近づけさせない性質のものであった。吉本氏はこのような状況下において、ヨーナスの環境倫理学を正しく理解するためには、その底辺にある生命哲学を正面から取り上げる必要があると考え、この二つを統一的な視座から結びつけようと試みた。以上の問題意識および問題設定は注目に値するものであり、このような視座から再構成されたヨーナス倫理思想体系は、学問的にきわめて価値の高いものとなったと判断される。

次に先行研究および文献学的目配りであるが、吉本氏は欧米におけるヨーナス研究文献（ミュラー、ヴェッツ、レーヴィ、ハルムス、ウォーリン、ヘスレ、ミュラー、ヴィレ

ら)を網羅的に検討し、ヨーナス研究の国際水準を把握した上で、先行研究の到達点と未到達点を析出し、みずからの論文の存在意義を彼らの研究との関係において明確に打ち出している。また日本における研究文献(加藤、品川ら)をも検討し、とくに品川の業績については本論文中において立ち入った検討を加えている。このように、吉本氏はこれまでの先行研究の上に自身の論を構築しており、堅実な博士論文として構成されていると判断される。

第三に、立論および論証における独自性であるが、これについて以下に詳述することにする。

吉本氏の立論の第一の独自性は、ヨーナスの主張する環境倫理学における「将来世代への責任」が、ヨーナスの生命哲学によって緊密に基礎づけられていることを明確に示し、生命哲学から環境倫理学へと直結する論理の糸をあぶり出したところにある。この論理の筋道はヨーナスの二冊の主著『責任という原理』と『有機体と自由』を統一的に把握してはじめて析出されるものであり、その作業を行ない得たところに本論文の大きな価値と重要性があると判断される。

すなわち、ヨーナスによれば、地球上に誕生した原初の有機体は、みずから新陳代謝を行なうことによってのみ自己崩壊をまぬがれるのであり、そのような自己肯定を通じてはじめて生命という存在が登場した。ここにおいて「無よりも存在を」という根源的なモチーフが生命に刻み込まれつつ誕生したのであり、そのような「生命の自己肯定」の延長線上に人類が登場したとされる。したがって人類は「存在が無よりも優位である」という形而上学を内包しているのであり、環境危機の時代にあつて人類が将来も存在しつづけることの根拠がこれによって与えられるとヨーナスは考えているのである。「将来世代への責任」とはこのことを指す。吉本氏は、これを存在論に根ざした倫理学であるとする。これは存在と価値を二分してきた近代哲学に独自の視点から異を唱えるものであり、吉本氏はここにヨーナス倫理学の革新性を見出している。このような見通しを与えた点が、本論文における吉本氏のヨーナス研究の第一のオリジナリティであると判断される。

第二の独自性は、以上のようにヨーナス思想を再構成したのちに、その根源である「存在の優位」に実のところ論理的根拠がないということを明確に指摘した点である。ヨーナスは、生命の存在はそれを観察する人間の主観とは独立に、それ自体として「善」であるとしているが、これはやはりひとつの形而上学であつて、それ以上遡り得ない究極的な確信にすぎないことを吉本氏はヨーナスのテキストを分析して明らかにした。これ

は次項へとつながる重要な指摘である。

第三の独自性は、ヨーナスの倫理思想を、アーペルらの討議倫理学と比較検討することによって、ヨーナスが提起した問題を新たな視座から議論する可能性を、吉本氏が開いた点にある。アーペルは、上記のようなヨーナスの形而上学を退け、そのかわりに、理想的なコミュニケーション下における発話は将来の人類の存在を遂行論的に前提しており、その意味で将来世代の存在は倫理的に基礎付けられ得るとしている。吉本氏によれば、アーペルは超越論的反省によって究極的基礎付けを与えられ得るとするカント主義の後継者であり、これに対してヨーナスは未来を本質的に考慮することないカント主義を批判するところから未来倫理を構想している。したがって、この二人の対立は結局のところ「近代」をどう捉えるかについての対立であると吉本氏は結論する。ヨーナスを討議倫理学と対比させることによって、それを近代批判の文脈に置いた点は、今後の議論を大きく誘発する可能性を秘めており、本論文の独自性であると判断される。またこれに関連して、吉本氏はヨーナスによる存在への賭けを、パスカルの賭けと対比して論じている。パスカルは賭けにおいて掛け金を彼岸の側へと置いたのに対し、ヨーナスは掛け金を此岸の側に置いており、パスカルの「実存の賭け」とヨーナスの「人類の賭け」のあいだには根本的な差異があると吉本氏は主張する。これもまた将来の議論への礎になると考えられる。

本論文は、以上に述べたような独自性を有しており、先に述べた判断基準をすべて問題なく満たしている。よって、本論文は博士論文として十分に評価に値すると判断される。とはいえ、本論文によって実現されることのなかった論点があるのも事実である。

たとえば、ヨーナスには医療倫理学の研究業績がある。たしかにこの方面においてヨーナスは体系的著書に当たるものを刊行してはいないし、現在の医療倫理学においてはヨーナスの思索は傍流のものとみなされている。しかしながら、ヨーナスの医療倫理学もまた彼の生命哲学や環境倫理学と密接な内的関連性をもって構想されたものであり、それを解明するのは研究者に残された重要な仕事であろう。

あるいは、本論文で検討された「存在の優位性」についての議論であるが、将来世代が存在すべきことを結局のところ賭けや確信によってしか訴えられないというのであれば、やはりそれは倫理的に基礎づけられているとは言えないという反論があり得る。人類の消滅は肯定できるかどうかについての哲学的議論が、ごく最近、ヨーナスの刺激によって開始されているが、本論文ではこれについての検討を行なっていない。

しかしながら、これらの論点は本論文の価値をいささかも下げるものではなく、かえっ

て本論文のアクチュアリティーを強調させるものであると判断することができるであろう。今後の倫理学に対する本論文の寄与は大きいと考えられる。

以上すべてを総合して、本委員会は、吉本氏の論文は課程博士論文として要求される水準を満たしていると判断する。